

☆2023年6月11日(日)札幌桑園教会 主日礼拝説教 牧師 秋本英彦
『新しい使徒の選び—②』(使徒言行録 1章 12—14節、21—26節)

緒 論 復活のキリストは弟子たちの前にその姿を現されました。そして40日間共に過ごされた後、神の救いが次の時に移ることを感じます。そして聖霊が弟子たちに注がれることによって世界に福音が告げられるようになる」と語り、オリーブ山から天に昇られました。地上に残された弟子たちは、復活のキリストが示されたエルサレムで祈り、待ち、そこに聖霊が下ったことがペンテコステ、教会の始まりになったのです。私たちも自分の考えや決断を第一するのではなく、神の導きと示しを第一に、新しく献堂された桑園教会において、祈り、待ち続けること。この場所から伝道に励むことが重要であることを確認しました。先週もこの箇所を学びましたが、もう少し御言葉を掘り下げて見てゆきたいと思います。

本 論 I. 最初に13節から14節をお読みします。

「彼らは都に入ると、泊まっていた家の上の部屋に上がった。それは、ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ、フィリポ、トマス、バルトロマイ、マタイ、アルファイの子ヤコブ、熱心党のシモン、ヤコブの子ユダであった。彼らは皆、婦人たちやイエスの母マリア、またイエスの兄弟たちと心を合わせて熱心に祈っていた。」(v13-14)

前は触れませんでしたでしたが、最初にこの弟子リストに注目しましょう。よく調べますと三つのグループに分けて考えることができます。第一集団は最初に選ばれた12弟子の中からユダを除く11人の使徒たちです。ペトロ、ヨハネ、ヤコブ、アンデレ。順序は異なっていますがペトロとアンデレ、ヤコブとヨハネは兄弟です。それから特徴的な表現を加えますが、フィリポ、復活のキリストを最初頑なに信じようとしなかった疑いのトマス、バルトロマイ、ヨハネではナタナエルと呼ばれている人物。徴税人マタイ、アルファイの子ヤコブ、別名小ヤコブ、それに熱心党のシモン、ヤコブの子ユダ、別名タダイとも呼ばれている弟子。この使徒11人が第一のグループです。この弟子たちは主イエスが捕らえられたとき逃げてしまったり、故郷のガリラヤに戻ったりしてしまった弟子です。脆弱に弟子と呼べるかもしれません。第二グループは14節に出てくる婦人たちです。女性の名前は記されていませんが、ルカ福音書によるとマグダラのマリア、ヨハンナ、スザナを始めとする女弟子たちで、ガリラヤからエルサレムまで共にキリストと旅をした婦人たちです。近くの町ベタニアのマルタやマリアもいたかもしれません。彼女たちは十字架のキリストを見届け、主の葬

りのために仕え、復活を目撃した女性たちです。男弟子と対象に力強さを感じる女性弟子です。ここまではルカ福音書に出てきますが、第三のグループは本書で始めて登場します。それは主イエスの母マリアと主イエスの家族です。ここでは主イエスの兄弟の名は記されていませんが、マルコによる福音書ではヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの4人の兄弟の名が記されています。関連箇所には妹もいたと書かれています。彼らは主イエスの公生涯において、イエスの活動に好感を持ってはおらず、家に連れ戻そうとしたことも書かれています。けれども母マリアは十字架を目撃し、他の兄弟にも何らかの信仰的感化を与え、エルサレムにやってきて主を信じる一員になっていたことが分かります。このことは主イエスですら死をもってでなければ家族を信仰に導くことができなかったという面を教えてください。けれども自らが神への死に至るまでの従順によって、初めて家族伝道は実を結んだのです。伝道にはこのような一面があるのです。「私の家族は無理」と諦めてはいけない事項です。聖書が、そして主イエスの生涯が証言しているからです。

本論Ⅱ. 次にこの三つのグループは、一体どのように関わっていたのでしょうか。第一グループは主が捕らえられた時に逃げ去った男の弟子たち。第二グループは最後まで従った女の弟子たち。第三グループは主イエスの死語、決定的な決断をして仲間に入ったイエスの家族と分けられます。今まで主イエスを中心に微妙な距離感があつた集団が、復活のキリストとの出会いを通じて、心を合わせて祈ることによって一つのまとまりある集団を形成し始めています。ここに教会の本質があることを見極めたいと思います。教会も様々なグループがあります。長老たちによって形成される小会、執事によって形成される執事会。日曜学校や諸奉仕の会があります。あるいは桑園教会で信仰を導かれて今に至る人。他教会や他教派から群れに加わった者。新会堂になってから新たに信仰の友になった者もいます。前の会堂の価値観をそのまま新会堂に取り入れようとする人もいますし、新しい会堂には新しい理解をと受け止めている人もいます。たとえグループとして分けられていたとしても、みな復活のキリストに結びついているのです。逆に言うならば、復活のキリストと結びつかずに自分たちの主張だけを表すと、真の交わりから離れてしまう危険性があることも教えられます。違うグループに属する者も主イエスに結びつく時、それぞれも互いに結び合わされるのです。今までの集まりとか、血肉とかではなく主に期

待し待ち望む信仰と他者への伝道という一致した絆が、それぞれの違いを結び合わせるのです。いかにキリストと結びつくことが大切か。そのことを気づかせるために著者ルカは記したといえるのです。

もう一つ目を向けたいことがあります。それはそこに集まっていた人数です。1章15節をご覧ください。こう記されています。「**そのころ、ペトロは兄弟たちの中に立って言った。120人ほどの人々が一つになっていた**」(v15)。弟子たちは120人いたことがわかります。さらにこの数字を吟味してみましょう。先に伸べた11使徒、女弟子、イエスの母や兄弟たちという三つのグループのみならず、まだいたことがわかります。実に120人もの人々がいたことが明らかになっているのです。イエスが十字架に上げられたとき11使徒と女弟子を合わせてもせいぜい30人程度でしょう。それが120人近くに増えていたのはどうゆうことでしょうか。ヨハネ6章66節をご覧ください。そこには、「多くの弟子たちが去っていった」とも記されています。ルカ福音書10章には72人の弟子がいたことも記されています。そこから考えますと、かつて主イエスに躰き離れた者たちが時を経てまた招集されていると考えることができます。人間の招く可能性を超えた神の再召命の可能性に包まれているのが主の教会ということもできます。

さらに当時のパレスチナの人口は歴史的に約400万人とされています。キリスト者は3万人に一人の割合です。今、日本のキリスト者人口は約100万人、約100人の一人です。今の日本の方が遙かにキリスト者比率は多いことも見えてきます。初代教会はこんな小さなところから始められたのです。ですから自分の回り、職場や共同体で、ただ一人のキリスト者であっても恐れることはありません。教会の始まりはもっと小さかった。小さな源から福音は広がってゆく、そして死に至るまでの神への忠実は家族を救いに導く可能性があることを覚えてほしいものです。

また120という数字が実際の数字なのか、それだけの人が入れる部屋があったのかという疑問もわいてきますが、おそらくは12部族とか12使徒の数の10倍というイスラエルの民全体を用いているとも思えます。正確な数字か象徴的な数字を用いていると考えることができます。いずれにしてもこれらの人々が一つになって祈っていたことに注目したいのです。この集団が教会とはまだ言えません。まだ自分たちの役割も聖霊も受けていません。しかし祈りつつ神の指示を待つ集団は、やがて聖霊が降ることによって成立する教会への確かな手応えでした。備えて待つ群れに聖霊は下り、神はご自身の器として用いて下さるのです。

結論. 最後に、もう一度、新たな使徒の選びに目を向けましょう。ペトロの演説の目的はユダの欠けを補うために一人の使徒を選ぶことでした。数を満たすことによって、主イエスが最初に選ばれた 12 人の原点に立ち戻り、そこから新しい出発をして伝道のわざに励もうとしたのです。

ペトロは使徒としてふさわしい資格を二つあげています。一つはイエスがヨハネから洗礼を受けて公の活動から死に至るまで、主と共にいたことです。これが一つの条件でした。もう一つは主の復活の証人であることです。どちらもキリストの存在や働きに固く結びついたことです。人間の的な能力とか身分は問題とされてはいません。能弁さ、人生経験、知識も補う者の資格にはなっていないのです。生きるキリストとの関わりの中で、使徒としてふさわしい働きをする者は、キリストと共に生き、キリストの復活の承認であることです。その意味では私たちも次の使徒候補であるとすら言い得るのです。

120 人の中から選ばれた一人はバルサバ、ユストとも呼ばれたヨセフ。もう一人はマティア、前の聖書ではマツテアになっていた人物です。集まっていた 120 人の中で 12 人目の使徒に選ばれる最終的な決定はくじによってなされました。この方法を採用するには、神の選びや決定が先にあるという信仰が求められます。自分たちが考えて、望む以前に、神の決定と選びがなされる。それがくじで決められる。そこにはどこまでも神の意思に服従するという信仰が込められていました。箴言 16:33 節「くじはひざの上に投げるが、ふさわしい定めは全て主から定められる」とある通りです。

その結果、マティアが 11 人に加えられました。けれども不思議なことに選ばれたマティアも落ちたユストも、11 使徒もこの後ほとんど登場しません。使徒言行録なのになぜでしょう。それは世の中では大きな働きをした人が業績や名を残しますが、神はそうではないからです。名も記されない、働きも記されない者ほど、神が覚えておられるとの確かな印です。私たちも今日新たに選ばれた者として、祈り、立ち上がり、世に向かって主の務めを果たしてゆくものでありましよう。その源となるのは、いつも主の教会なのです。